

佳作 — 第一部門 —

ムツちゃんとともに



佐賀県

石川照茂

週末、私にとって今一番充実して「生きている」と実感できる時である。それは、ムツちゃんと一緒に行動できる時だから。

「なぜ週末？」かって、それは私が療護施設にいるからである。だから施設の日課のない金曜日の夜から、ムツちゃんと借りている部屋に行って、日曜の夜に施設に帰ってくる。そんな生活をもう6カ月送っている。

今、彼女のお腹には新しい生命いのちが宿っている。わかったのが9月中旬だよ。今3カ月目。生まれるのは、予定日が来年の4月25日。その事を知った時、二人とも「どうしよう」という気持ちが先だった。

私は、現在の施設にいる状況や、経済的状況を考えると「産めないよ」と言ってしまった。その時、彼女の目に涙を見た。彼女の気持ちを私は知らなかった。「これからも私と二人で、生きて行こう」彼女そこまで覚悟してくれていた。彼女の気持ちを知り、ムッチャンが「産みたい」、その一言で私の気持ちも決まった。私39歳、ムッチャン29歳の秋。

施設に入って30年になろうとしている私に、まさか自分の子どもを産んでくれる人が現れるとは思ってもいなかった。嬉しい、本当に。だって私は、一歩外に出ればトイレだって介助が必要だし、車椅子も押ししてもらわなければならぬ。食事にしても介助が必要なのです。もちろん30年近く施設にいるので、仕事もした事がない。経済力なんて何にもないんです。それでもムッチャンが、産みたい、と行ってくれた事に心から感謝している。

早速、私の親に報告と、許しをもらう為に二人で私の家に行った。話す前まで二人とも、産む事を反対されるだろうと思っていなかった。しかし、父は、「二人の決心がついているのなら、全面的に応援する。先の事はみんな考えて行けば良い。今は彼女に、元気な赤ちゃんを産んでもらう事が大切な事だ」と言ってくれた。

「ただ彼女の両親が許してくれるか、どうかはわからない。だから彼女も勘当ぐらゐは覚悟しておいて

くれ。後はこの家に来て、長い目で両親の許しを待とうよ」

と言い、彼女に、

「こんな息子の子どもを産んでくれる君に感謝する。息子の子、孫を抱けるとは思ってもいなかった。ありがとう」

そう言った。

母は何も言わずに、父の話を聞いていた。何かとても複雑な母の顔が目に残る。心から両親に感謝します。「ありがとう」 借りている部屋に帰る時、一番安心してたのは、やっぱりムッチャちゃんだった。本当に良かった。

しかし、二人ともここまで来るのに、随分と回り道をしてしまったような気がする。

私がムッチャちゃんと出会ったのは、もう10年以上も前になる。そう、彼女が高校生の頃である。

佐賀の第4回わたぼうしコンサートで、彼女は介助ボランティアとして、私は詩の作詞者として出会った。たまたま彼女の家が、私のいる施設の近くだったので、たまたま施設に顔を出す事もあった。そんな中で少しずつ親しくなっていた。そして、ムッチャちゃんは高校を卒業して、地元の病院に看護婦として就職した。

実は私は、過去に一度彼女にみごと「ふられた」事がある。あれは昭和63年ごろ、彼女が23歳を過ぎた頃だったと思う。

この頃になると、彼女が日曜日の休みの時などに、外出して買い物に行ったり、ドライブに行くようになっていた。介助の方は、彼女の職業が看護婦なので、異性介助にも自然に慣れてくれた。その他にも、仕事の帰りによって話したりしてた。そのうちに自分の心の変化に気がついた。

「私はこの人をいつの間にか好きになっている。だけど自分の身体からだの事を考えると、この気持ちを伝え方が良いのか。それとも今のままで永くつきあいを続けて行く方が良いのか」ずいぶん悩んだ。しかし、思いきって話したら、

「恋愛に障害者も健常者もないよ。自分の気持ちに素直で良いんじゃない。OKよ」と彼女の答え。

そして、つきあい始めて半年程して、若かったからろくにお互いをわかってとする前にプロポーズをしてしまった。そして彼女は私の前から姿を消してしまった。「あなたの障害が別れる原因じゃないからね」という、手紙を一通だけ残して…。

障害があるよね、あせってしまうか、何も言えないで終わるか、のどっちかみたいだった。あの頃は特にね。自分の中で「この人を失いたくない」そう思ったら、プロポーズしか思いつかなかった。自分の身体からだが動かないから、他の人にすぐ取られそうで不安でたまらないのよ。それならもっとその人を信用していればいいのに、その頃はそれが出来なかった。

それからしばらくして「ムッチャン、結婚したよ」とボランティア仲間から聞いた。やっぱりシヨツ

クだったなく。その後、何年かボランティア活動に参加する気になれなかったからね。

そんな彼女が、2年前の11月にまた施設に顔を見せた。この頃は私も、あの頃のショックから完全に立ち直って、また新しい目標を持ってボランティア活動に参加していた。

「今どこにいるの？」私の最初の言葉。

「今、家にいるよ」とムッチャン。

私は何となく、てれくさいような変な気持ちだった。次に出た言葉が「今シングル、それともペア？」われながら、何とも妙な質問である。彼女は嫌な顔一つせず、

「今、シングルよ。指輪ないでしょう」

と左手を見せながら答えた。

「これからまた、ちよくちよく顔出すからよろしくね」と昔のままの笑顔だった。

「何かあったらTELちょうだい。私が都合のつく時は来るからね。TEL番号覚えてる？」と聞かれて、

「ムッチャンのTEL番号なら今でも何も見なくても覚えているよ」

と私。不思議なもので、彼女と別れて4〜5年になるのに電話番号だけはしっかりと覚えていた。「なら大丈夫ね」とムッチャンは言って、その日は帰って行った。

この時が、ムッチャンとの新しいつきあいのスタートだった。それから現在に至るまで、二人のつき

あいには、いろんな障害もあったが、楽しい思い出も多く残った。

私が、ムッチちゃんをまた一人の女性として意識し始めたのは、その年の6月ぐらいだったと思う。この時期になると、土、日はほとんど施設にいない状態。ほとんど彼女と一緒に、ボランティア活動に参加したり、風景写真を撮りにいったり、ドライブしたりしていた。泊まりがけで、コンサートも見に行っただけ。お酒も飲みに行った。まるで、今まで施設を出られなかった時間を取り戻すように。

だけどもムッチちゃんに自分の気持ちは伝えられない。その大きな理由は、彼女が別れた彼を忘れきれずにいる事である。このころでも、時々彼と逢っていたみたい。私は、彼女と別れた彼の関係もすべて聞いていたから。その彼は、すでに他の女性と同棲している。その事でのトラブルもあったようだ。そんなプライベートな話や、相談もしてくれるようになっていた。

それでいつも泣くのは彼女だ。それでも、まだ忘れられないでいる。私も、

「いい加減に離れろよ。忘れるには時間がある。後は時間しか解決してくれないよ。それが彼とムッチちゃんのお互いのためだよ」

と何回か言った事がある。彼女も、

「それはわかってる。だけどね……」

そんなやりとりが何回かあって、完全に彼と別れたのが9月ぐらいだったのかな。私の気持ちは別にしないで、ムッチちゃんの為には、これが最良だと思った。だって何かあって、泣くのはいつもムッチちゃんだっ

たから。

この時期は、自分の気持ちよりも、ムッチャんに早く立ち直ってほしい。その為なら私はどうなってもいい。そう思ってた。だから、

「大きな問題が一つ解決して良かった」

心からそう思った。

そんな問題の中から、自然にお互いに「心の絆」が出来ていたように感じる。

やっと自分の気持ちを伝えられたのが、今年の2月。昔の失恋の後遺症もあって遅れたかな。今回も、ムッチャんは素直に受け入れてくれた。感謝感激でした。

もう一つの問題は、施設の中の嫉妬の目と、興味に満ちた噂だった。季節も過ぎて、8月、9月となると、入所者の中には、週末の私達の外出について、嫉妬の目で見る者が出て来た。確かにそんな目で見られても、しかたのない事もあるだろう。施設内には、日頃外に出る機会が少ない者の方が多いのだから。

しかし、誰かが「彼等が日頃、自分達が外に出ようとする努力をしているか？」そう聞いたとすれば、それは一部の人を除けば「NO」とそう答えるだろう。くちはばったいたい言い方かも知れないが、私達は私達が外に出て活動する姿を見て「自分も外に出たい。とうしたら良いの？」と彼等に聞いて来てほしかった。そうすれば、ボランティアの紹介、障害者でも楽しめる行楽地、トイレなどの心配のいらな

デパートとか教えてあげられるのに。そんな事は、誰一人として聞かない。一部の職員も、私達と同じ考えだったようで、「そんな動きを期待していたのに」の声も。

しかし、逆に職員の中や、同じ仲間の入所者の中には「外出が多くて困る。それも介助者はいつも同じ女性。あの二人はどういう関係なのかね」と陰で話す。そう言えば施設の「外出規定」の中に、こう言う文章がありました。

『男女一対一の外出はつつしむ事』

まるで、中学や高校の校則の中に出てくるような文章ではありませんか？。そんな文章が、大人の施設である療護施設の「規定」に入っているんです。それこそ施設側は、私達を「大人として認めていない」としか言い様がない。それ自体に、私は怒りを感じてならない。そしてその事に、いったい何人の入所者が気付いているのだろうか？ ほとんどの人が気付いていないから、一部の入所者が職員と一緒に、同じような陰口を言えるのだと思う。

そして3月の終わり、大きな事件になった。この日の昼間、ムッチャンが面会に来ていた。その彼女に対して、私と同じ部屋のMさんが罵声をあびせ、実際には言ってもいない事を職員に言ったと彼女に言ったのだ。彼女の私とのつきあいのしかた、彼女の離婚の事や、プライベートな事まで「上司職員から聞かれたから全部話した。施設側もあなた達のつきあいに迷惑している」と言うのだ。

その話を聞いてムッチャンは、

「私がここに来なければ、貴方に迷惑をかける事もない。もう来ないね」

と泣きながら私に言い、そのまま飛び出して行ってしまった。私は必死で追いかけたが、追いつくはずもなく、彼女は車で走り去ってしまった。

ムッチャんの性格を良く知っている私は、心配でなりません。夜、彼女の家に電話しても、帰っていない。不安は広がる一方である。「もしかして……自殺」そこまで考えてしまう。彼女、思い詰めるとそこまで行きそうで。幸いにも、翌日外泊予定で、彼女が送ってくれる事になっていた。だから必ず連絡がある。と思いつつも、心配で、年配入所者のNさんに相談した。そしたらNさんが、

「お前が彼女を信じてやらなくてどうする。彼女にはお前しかいないんだぞ。しっかり連絡を待ってやれ」

と怒り、励ましてくれた。

翌日、彼女の連絡を待ちながら、担当職員に昨日、Mさんが言った事が事実かを確認した。私の担当職員も「そんな話は聞いていないし、聞いた事もない。上司にも確認したが、そんな事実はない」という事だった。担当職員と話している最中に、彼女から連絡があった。私は電話を代わってもらい「今どこにいる。場所を教えて。タクシーですぐ行くから」と、ムッチャんは涙声で「今どこどこにいるけど、貴方に迷惑をかけたくない。逢えない」と言う。しかし、「ここで逢わなければ」そう思い「もう施設の許可は取ってある。昨日の事は全部Mさんのでまかせだともわかった。施設側も謝りたいと言ってい

る。だからそこにいて。すぐ行くから」と私は必死だった。彼女は小さい声で「わかった。ここで待ってる」そう言ってくれた。私は急ぎ彼女の所へ。ムッチャンと逢った時、二人で泣いて抱きあったよ。彼女の存在の大きさを、思い知らされた。

「もうどんな事があったって、絶対にムッチャンをはなさない。私が守って見せる」この時、そう誓った。この後、一週間程、私の家で、お互いの気持ちが落ち着くまでと、これからの事を話し合う為にごした。彼女、仕事を休職して。結局、この事件が二人の気持ちをよりいっそう結び付ける結果となった。

家にいる間に、お互いに自分の気持ちを正直に話し、二人で部屋を借りる事を決めた。施設の方にも二人で行き、二人で部屋を借り、私が週末そこで過ごす事を説明した。担当職員も、

「こんな事件があったから、貴方達が将来の事まで考えて、そこまでするのなら、そっちの方が良いだろう。頑張りなさい」

と理解を示してくれた。施設側が、事件の事をムッチャンに謝罪した事は、言うまでもない。部屋を借りる事は、もちろん私の両親にも話していた。そして4月中旬に、てごろな部屋を見つける事ができた。そして現在に至っている。

私達の間にも、子どもが出来た事も、親に話した後、施設側にも、私と、私の両親と、ムッチャンの4人で話しに行き、施設も全面的に応援してくれる事を約束してくれた。こんな形、前例がないんで対応

にチョッピリ困っていたようだ。

後はムッチちゃんの親だけ。この事が一番の難関のようだ。娘の結婚相手が、重度の障害者。経済的な保証も今はないに等しい。それに、あと半年もすれば、育児と私の介助の二つの負担を抱える事になる。もしかしたら、仕事という3つ目の負担も加わるかも知れない。そんな相手に、簡単に結婚の許可を出す親はいないと思う。

しかし、私は誠意を尽くすしかない。生まれて来る子どもを、今守ってやれるのは、私とムッチちゃんしかないのだから。

もう頑張るしかないんだ。逃げる事は出来ん。やるしかないんだ。ムッチちゃんと二人で力を合わせてね。ボランティアの多くの仲間も、応援してくれている。施設の仲間も、職員さんも、応援してくれる。多くの人達の為にも、また生まれて来る子どもの為にも、自立を目指して頑張らなければならない。

今まで30年、施設というぬるま湯につかって甘えて来た。それから早く脱して、本当の意味での自分の道を見つけて行きたい。もちろん、ムッチちゃんと子どもという、二つの柱に支えてもらいながら。またその二つがあるからこそ、頑張れるのだ。ムッチちゃんと二人で歩んで行く。

越えなければならぬ問題は、まだまだ沢山ある。それを一つずつ、ムッチちゃんと一緒にクリアして行こう。来年の今頃は、一人増えて四苦八苦しているはずです。

自分の妻、そして子ども。本当に自分に家族が持てるなんて……夢のようです。家族が出来るなんて本当に幸福しあわせです。

・石川さんはこの作品を応募後入籍、平成七年一月末に施設を退所して家庭生活を始められています。

石川照茂

昭和三十年生まれ 施設の暮らしから家庭生活をめざす
佐賀県佐賀郡

選評

石川さんとムツちゃんの愛情物語が素直な表現で描かれ、読む者に感動を与える作品となっている。まずは二人の愛に拍手を贈り結婚生活に幸多からん事を祈ります。車イスでの施設暮らし三十年。ムツちゃんと再会する事で外に向かつての行動力を得て、新しい世界を構築してゆく石川さんの姿が、またムツちゃんへの思いが生き生きと描かれている。愛がいかに一人の人間を力強く成長させるかを、改めて考えさせてくれる作品である。

(松尾 武)